

---

# 日本はきもの博物館収蔵資料紹介

## ～19世紀中期の靴～

日本はきもの博物館学芸員（非常勤） 市 田 京 子

---

### はじめに

ここでは、日本はきもの博物館（広島県福山市）に所蔵されている欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料441点を順次紹介させていただいている。

本誌160号で紹介したように、18世紀末期から19世紀前半、靴からヒールが消えた。非常に低いヒールがみられることはあっても、足元を高くしたいというヒールに託された思いは形として表れていない。これはシンプルさが求められたドレスのファッションにしたがうものでもあったといえ、その後スカートが大きな張りを取り戻すとともに、ヒールも再び姿を現している。今回はその19世紀中期の靴を取り上げる。

なお、掲載する写真は全て日本はきもの博物館所蔵である。

### 1. ヒールの再登場と靴の変化

ここでは19世紀中期、1850年代から80年頃までの靴を紹介するが、この時期、靴には大きな変化があった。それは、スタイルとしては女性用のブーツの登場とヒールの再登場であり、技術的にはミシンの出現とその波及によるものであった。

女性用のブーツの萌芽は19世紀初頭のようにであるが、産業革命によるハト目金具やゴム入り布、貝ボタンの出現で、足にフィットするものになったことでファッションとして定着している。また、当時の「女性の

足はみせない」というタブーから、大きく広がったスカートがゆれて裾から足が覗くのを防いだともいう。

ヒールは「1851年までには1/2インチ（約2cm）になり、60年代には2 1/2インチ（約6cm）になった」という（注1）が、当初は高過ぎるのではないかという非難も聞かれたそう。しかし、ヒールの再登場は靴のファッションには不可欠であったし、靴を如何に履き易いものにするかという試みのスタートにもなったはずである。

ミシンの使用は靴作りの幅を広くしている。1850年代までに布靴の甲に使用されるようになり、56年には革への使用もはじまった（注2）。これによって靴の大量生産が可能になり、それまでのカスタム・メイドからレディ・メイドへと大衆化することでデザインの多様性を生み、それが、また、履き易さ実現の原動力にもなっていったと考えられる。

ただ、この変化は必ずしも期を同じくしたものではなく、地域や作り手、職人による変化の進捗に差があったようで、残された靴にはその点からともみえるバラエティがある。博物館収集資料では、浅靴にはミシンの使用例は少なく、手縫いによるものが多い。また、履き心地に大きく作用すると思われる土踏まず部の補強もあまりみられないが、踵部には薄い半円形の補強材が入るものが増えている。履き易さには左右



写真1



写真2

の別の明確化も大きく関わるが、この時期にはまだ画期的なといえる進展はない。写真1は1850年頃、写真2は70年頃の底である。前者は内側をカーブさせて左右を分けてあるが、フラットな底のままにヒールが装着されていて、側面からみるとヒールから爪先に下りる線が平坦なままである。後者になると、底革自体も硬くなり、土踏まず部をやや厚くして支えとし、内外のカーブに差をつけることで左右を分けてある。側面からみると、しばらくヒールの高さを保って短いカーブで爪先に下りている。注意しなければ左右を取り違える程の差であるが、左右を分け体重を支える意図はうかがえるであろう。

## 2. 19世紀中期の浅靴

写真3はアイボリーのシルク・サテン製で、同じサテンのリボン飾りは裏打ちをして立ててある。甲の裏打ちは前部白布、後部白革であり、この形が定着している。内底も白革敷きであり、底革に左右の別はない。カーブのあるヒールもアイボリーのサテンで巻かれている。土踏まず部の補強はなく、ヒール部から爪先への線は平坦である。踵部には半円形の薄い補強材が入る。

ラベル：CHAUSSURES FINES S URS



写真3



写真4

SCHNEIDER 16, Corraterie, 16, GENEVE。

1860年頃。長24.0×幅6.8×全高10.3cm、ヒール高5.0cm。

写真4はブラックのシルク・サテン製で、全体に非常に精緻なバラをモチーフとした刺繍が施され、色を合わせた4色のシルクのリボン飾りが付く。甲の裏打ちと内底にはワインレッドのシルクが用いられている。シックな華やかさを漂わせた靴である。甲と同材で巻かれた曲線的なヒールから爪先への流れも美しいが、土踏まずの補強はほとんどなく平坦に下りている。底革にわずかな左右の別がみられる。

ラベル：VIAULT-ESTE FOUR BREVETE DE S. M. L' MPERATRICE 17 Rue de la Paix PARIS / THIERRY&SONS Regent Street, 278 LONDON。

1865年頃。長22.9×幅5.9×全高9.4cm、



写真5



写真7



写真6



写真8

ヒール高4.5cm。

写真5はブルーの小山羊革製で、スクエアにカットした深めの甲が新しい印象であり、ブルー・シルクのリボン飾りが付く。甲の裏打ちは前が白いシルク、後ろが茶革、内底は白シルクで、ヒールは6枚重ねの積み革である。左右の違いがみられる。

1870年頃か、アメリカ。長23.7×幅6.7×全高7.6cm、ヒール高3.0cm。

写真6も非常に美しい靴である。ブルーのシルク・サテン製で、爪先部には黄色シルク糸の花柄刺繍が施され、履き口にはきれいに折り重ねたベルト飾りが2本付き、その中央にはメタル・ビーズの小さなバックルが付いている。この靴の丸い爪先とヒールの形は1860～70年の典型である。踵部は補強されず直線的に立ち上がり、左右の違いもほとんどない。

ラベルはないが、外底にM.VAPILLON

CONSTANTINOPLEの刻字があり、トルコで作られたようである。

長22.7×幅5.7×全高10.3cm、ヒール高5.2cm。

### 3. 19世紀中期のブーツ

この時期のブーツは足首までの高さのもので、ボタン留めはフロント外側、編み上げは内側側面で行われ、ゴム入り布は両側面に付けられる。

写真7は、現在は退色しているが、きれいなパープル・シルク製で、フロントに同色のグログランリボンを畳み重ねた飾りが付く。この飾りはフェネロンと呼ばれるという。ルイ14世の子どもの家庭教師を務めたデューク・フェネロンにちなむそうだ。木を包んだボタン6個で留める。ミシン縫いである。踵部の補強、左右の違いがある。

イギリス、1860年頃。長24.2×幅6.8×全



写真9

高15.4cm、ヒール高3.7cm。

写真8はブラウン・シルク製で、甲中央部に切り替えがあり、履き口後中央に取手になるシルク・テープが付く。甲部の裏打ちは薄い黄色のシルクである。側面形の履き口から爪先への流れが美しく、履く人の足の形をうかがわせる。編み上げの紐は同色で幅1cm程のシルク・テープで先端は柔らかい金具（アルミか）で巻いてある。12個の穴は手縫いでかがられている。ヒールは9枚の積み革で、左右の違いがある。

1860年頃、フランス。長24.6×幅5.8×全高14.6cm、ヒール高3.2cm。

写真9はブラック・レザーの、いわばサイド・ゴアのブーツである。両側面を前方は直線的に、後方はカーブをつけて切り取り、ゴム入りの布をあててある。履き口前後中央に取手となるテープが付く。

ちょうど日本に靴が入る時期に重なるもので、坂本龍馬で取り上げられることの多い、明治期に「深ゴム靴」とされたスタイルといえよう。

1860年頃、イギリス。長23.4×幅5.7×全高14.7cm、ヒール高3.5cm。

写真10は赤の革製である。フロントの編み上げ部と爪先・後部中央に黒の革が組み合わせてある。全体にミシンとみられる白糸のステッチ模様が入る。編み上げの穴は



写真10

ハト目金具で紐は焦げ茶色の糸を編んだもの（左用は補修）である。写真2はこの靴の底で、側面にカーブの強さがみられる。ヒールは10枚の積み革である。

受入時のデータでは「アメリカ」となっていたが、イギリスの靴研究家June Swann氏（注3）によると「1870～75年にノーザンプトンで作られたものではないか」という。

長24.2×幅5.7×全高15.5cm、ヒール高4.2cm。

#### おわりに

この時期の靴は、完成にはいたっていないながら、靴としてのフォルムの美しさがみられるように感じている。やはり、靴にはヒールが必要なのだとも思わせる。

次回は19世紀末期の靴を紹介する。

#### 注

- 1) June Swann "Shoes", B.T.Batsford Ltd. London (1982), 48ページ
- 2) 上記に同じ、39ページ
- 3) June Swann氏はイギリスのノーザンプトン・ミュージアムで長年靴の研究に携わられ、1994年博物館に来館。